

「原子爆弾空襲の体験」

寄贈／松田雅子

被爆時、東京帝国大学医学部助教授だった木本誠二さんの被爆体験記（写し）。
たまたまその日、牛田町の実家にいた木本さんは、次のように書き残している。



「…市街一円は既に濛々たる黒煙に包まれ、
数丁先からも火焰が天に沖して居る。
一点の雲もなかった快晴の空は黒煙と暗雲
に鎖されて薄暗く、稲妻閃き雷鳴さへ轟き渡
って凄愴を極めて居る。早くも避難者の群れ
は山腹に向かつて続々と続いて居り、重傷者
を背負って走る者、衣服も燃え全身焼け爛れ
乍ら人の肩に縋って逃げる者、僅に杖を運ぶ
もの等悲惨を悲惨として感ずるよりも、余り
の突然の激変と事態の真相が把握できぬ為
に呆然とさせられた次第である。それ迄自分
の居る家だけが焼夷弾爆弾の被害を蒙った
のだと信じ切って居た…」